5. 国清寺・毘沙門堂と奈古谷地区にみる歴史的風致

市内北東部の山付き集落である奈古谷地区は、地元の人々の間では「奈古谷七堂七坂」 という言葉が伝わっているほど、寺院と坂が多い地区である。現存する寺院・諸堂は5か

寺2堂だが、かつては20以上を数えたことが『豆州 表5-1 奈古谷地区に現存する寺院・諸堂 志稿』等の記録にも見えており、この言葉を裏付け ている。このような地区の特性から、中世から近世 にかけての石造物等も豊富に所在しており、中世以 来の信仰や、宗教的空間の様相を今に伝えている。 その中心となっているのが、奈古谷地区の集落内に 位置する「国清寺」や「観音堂」、集落東南の山中 にある国清寺の祠堂「毘沙門堂」、そしてそれらを つなぐ「毘沙門道」である。

名称	備考
①国清寺	臨済宗円覚寺派
②徳隣院	臨済宗円覚寺派
③高巌院	臨済宗円覚寺派
④龍泉院	臨済宗円覚寺派
⑤松月院	臨済宗円覚寺派
⑥観音堂	
⑦毘沙門堂	

(1) 国清寺・毘沙門堂と奈古谷地区にみる歴史的風致を構成する建造物

1)国清寺

国清寺は、円覚寺 36 世無礙妙謙を開山、 上杉憲顕を開基2とする臨済宗円覚寺派の 寺院で、上杉氏歴代の菩提寺として南北 朝・室町時代を通じて隆盛を誇った。『静 岡県田方郡誌』に「中本山寺格一等にて、 末寺五十八ヶ寺を有す」とある。本尊の「木 造釈迦如来坐像(慶派)」は、伊豆の国市の 指定文化財となっている。

本尊が安置されている方形 造 鋼板葺の 仏殿「大雄殿」は、延宝年中(1673~80)の 建立と伝えられており、周辺にはさらに古 い礎石や雨落ち溝が残る。 鐘楼は延宝8年 (1680)、庫裡は天明年中(1781~88) の建立 と伝えられ、昭和9年(1934)に改修されて いる。寄棟造瓦葺の本堂は、昭和9年(1934) の建立である。以下に述べる「毘沙門堂」 と「観音堂」は、いずれも国清寺の祠堂や 支院に由来する建造物であり、中世以来国 清寺を中心に形作られてきた宗教的空間の 一部をなすものである。



国清寺本堂



国清寺仏殿

102

¹ 国清寺の寺号は、歴史的には「こくしょうじ」であったと考えられるが、奈古谷地区では現在「こ くせいじ」と称されているため、本計画では「こくせいじ」とする。

² 開山は、その寺院の初代住職。開基は、寺院を創建する際に経済的支持を与えた世俗の実力者。

②毘沙門堂

国清寺から東南に1kmほどの山中に、国清寺の祠堂である「毘沙門堂」がある。大正7年(1918)刊行の『静岡県田方郡誌』によれば、現在の堂宇方形造鋼板葺は明治39年(1906)に建立されたもので、昭和50年(1975)に修理されている。また、毘沙門堂の本尊は慈覚大師が作ったとの伝承があり、本開帳は50年に一度とされている。毘沙門堂がある場所は、平安時代末期に文覚上人が配流されて



木造金剛力士像

いた地と伝えられ、江戸時代の再建と推定される参道の仁王門には、鎌倉時代の慶派に よって造像された、静岡県指定文化財の「木造金剛力士像」がある。

この一帯には、平安時代後期に「授福寺」「安養浄土院」あるいは「奈古谷寺」と呼ばれる古代山岳密教系の寺院があったといわれており、毘沙門堂や仁王門は、この古代寺院のなごりとも考えられる。



毘沙門堂仁王門



毘沙門堂

3観音堂

国清寺の南西ほど近くに「観音堂」がある。この観音堂には、市の指定文化財となっている「観音堂十王像」が安置され、現在も、地元の人々によって月1回の観音講が営まれている。入母屋造瓦葺の観音堂の建物は、昭和12年(1937)に再建されたもので、当時の奉加帳が現在も保存されている。この観音堂は、かつて数多く存在した国清寺の支院を前身とし、時代とともに廃絶した他の諸堂に祀られていた仏像や神像、石塔などを収容しつつ、現在に至ったと考えられている。



観音堂

堂内には、観音像をはじめ、十王像³、眷属⁴や奪衣婆⁵の像など多数の像が安置されている。また、敷地内には鎌倉時代から室町時代にかけての五輪塔の一部や宝篋印塔の一部等、中世から近世にかけての石造物が数多く所在している。

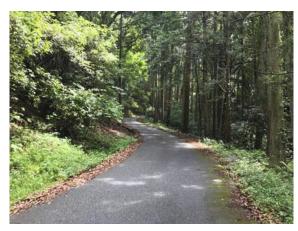
(2) 国清寺と毘沙門堂をつなぐ毘沙門道

国清寺から毘沙門堂に至る道筋には、通称「七つ石」と呼ばれる中世の磨崖仏や梵字を刻んだ巨石(「蛇石」「夫婦石」「弘法石」「大日石」「谷響石」「護摩石」「冠石」の七つ)、近世の道祖神、丁目石が点在している。七つ石の内、「弘法石」(至徳2年(1385)銘地蔵菩薩磨崖仏)と「大日石」(明徳2年(1391)銘地蔵菩薩磨崖仏)は、市の指定文化財となっている。また、国清寺の境内には、同時期の紀年

銘を持つ宝篋印塔の基台など、中世の石

造物が残る。

これら磨崖仏や石造物の存在は、関東 十刹に数えられ、南北朝から室町時代に かけて数多くの塔頭・支院を抱えていた 国清寺を中心として、その背後の山々を も含めた奈古谷一帯が一大霊場であった ことを示している。「毘沙門道」と呼ばれ るこの道は、中世以来、毘沙門堂への参 詣道としての役目も担ってきたと捉えら れる。



毘沙門道



弘法石

-道標「左ひしやもんみち」

江戸時代後期の幕臣、吉田桃樹の著し

た旅行記『繋游余録』によれば、寛政4年(1792)に桃樹が伊豆を旅した際、奈古谷の国清寺に立ち寄り、住職の案内で毘沙門堂を訪れている。その道すがら、「蛇石」などの七つ石を見たことが記されており、江戸時代にも、毘沙門道が参詣道として今と同じ道筋を通っていたことが分かる。この毘沙門道を歩く時、中世からの霊場としての雰囲気を、今も感じ取ることができる。

³ 十王とは、閻魔王をはじめとする、地獄において亡者の罪を審判する十尊のこと。

⁴ 眷属とは、不動明王の八大童子のように、仏に付き従う従者・脇侍のこと。

⁵ 奪衣婆とは、三途の川のほとりにいて、渡し賃を持たない亡者から衣服を奪う老婆の姿をした鬼。

(3) 毘沙門堂と奈古谷地区の行事

ア 毘沙門堂のだるま市

毎年1月3日早朝、毘沙門堂の例祭とともに行われ、市外からも含め、多くの参詣客で賑わうのが「だるま市」である。毘沙門堂の例祭では、僧侶の読経が行われるとともに、奈古谷の当番組の人々が鈴を振りながら御詠歌をうたう。そして、毘沙門堂の前には、大小様々な「だるま」がところ狭しと並べられ、普段は静謐な雰囲気に包まれている境内は、だるまを買い求めに来た人々の活気で溢れる。この日は、古来よりの参詣道である毘沙門道を、だるまを求める多くの参詣者が行き来する。

だるま市は、かつては青年団が行っていたが、現在は地元消防団によって運営されている。80歳代の住人によれば、毘沙門堂の例祭とだるま市には幼い頃(昭和20年代)から参加しており、その頃既に古くから行われている行事であったという。

毘沙門堂の例祭とだるま市は、非常に古くから行われている行事だと伝えられているが、記録上確認できるものとして、昭和9年(1934)1月3日の支出として毘沙門堂例祭の費用が記載されている「毘沙門天資金取扱帳」(国清寺蔵)があげられる。



毘沙門堂 例祭

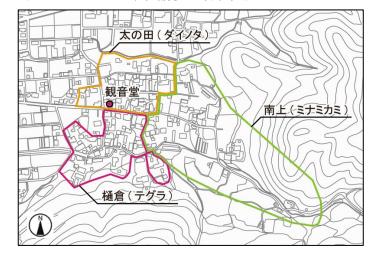


毘沙門堂 だるま市

イ 観音堂の観音講

奈古谷の集落内に位置する 観音堂では、現在でも「観音講 (お観音さん)」が継続的に実施 されている。参加者は、観音堂 近くの3つの組「太の田(ダイノ タ)」「南上(ミナミカミ)」「樋倉 (テグラ)」に属する家の女性た ちである。観音講は、この3組 の持ち回りによって、毎月17 日の夜に行われる。

図2-5-1 観音講参加者範囲図



観音堂に集まった女性たちは、正面に安置 されている千手観音像や十王像に線香を手向 けてから、鉦を叩きながら、決まった順番で 「三帰戒」「延命十句観音経」等の経文を唱え たり、和讃を歌ったりしていく。鉦の音や和 讃の声は、観音堂から周囲へも聞こえ、奈古 谷に残る古くからの信仰の形を、今日に伝え るものとなっている。観音講終了後は車座と なり、持ち寄った茶菓や果物を食べながら談 笑するのが習わしである。



観音講

観音講を行う際、線香を手向けるのに用いられている香炉に、明治28年(1895)10月 に奉納されたことを示す銘があることから、この観音講は、少なくともその頃には行わ れていたと考えられる。

(4) まとめ

図2-5-2

このように、奈古谷地区は、中世以来の宗教的な拠点であったことを感じさせる寺院 や石造物の存在とともに、それらをつなぐ毘沙門道も含めて、霊場としての様相を色濃 く残している。そして、奈古谷地区の人々が守り伝えている祭や民俗行事と相まって、 維持向上すべき良好な歴史的風致を形づくっている。



歴史的風致範囲図



【コラム 国清寺と国清汁】

国清汁は、一説によれば鎌倉建長寺が発祥とされる醤油仕立ての「けんちん(建長)汁」と同様、禅宗の精進料理のひとつである。その名は国清寺に由来し、600年の歴史があると伝えられている。野菜を油で炒めて味噌仕立てにした具だくさんの汁で、人参・牛蒡・椎茸・里芋・豆腐などを具材とし、米のとぎ汁を加えるのが特徴である。

禅宗の修行僧の間で伝えられてきたこの国清汁を、郷土料理として広めようと、平成14年(2002)頃から地元の人々が研究会を組織し、レシピの研究と普及に努めてきた。近年では、伊豆長岡温泉の旅館や飲食店で料理のメニューに取り入れられたり、小中学校の給食として提供されたりするなど、一定の広がりを見せている。

